

Wilde's American Lecture Tour

深澤清

(明星大学専任講師)

1881年4月23日、Gilbert and Sullivan のオペラ *Patience* がロンドンのオペラ・コミック座で上演され、Aestheticism に対する人々の関心は高まった。プロデューサー D'yly Carte はアメリカへも進出を図り、同年9月にはニューヨーク Broadway Standard 座でこれを上演し好評を博した。Carte の思惑は、上演に先駆けて 'aestheticism' に関する予備知識を人々に与えるために、ワイルドをその生きた広告塔としてアメリカに送り込むことにあった。翌年1月2日、ワイルドはアリゾナ号でニューヨークに到着し、5日には *Patience* の公演に足を運ぶ。観客にとって、舞台の主演 Bunthorne は客席のワイルドの姿と重なり合い、Carte の戦略は見事に的を得た。また、公演終了後 Carte の agent である Colonel Morse は、ワイルドを Sarony の写真屋に連れて行き、Bunthorne 的な衣装をワイルドに着せ写真撮影を行った。この撮影は重要な意味を持つ。1. 当時スターのプロマイド写真が流行するようになり、利益が見込まれたこと。2. Bunthorne のモデルはワイルドであることが明確になり、*Patience* の宣伝効果が高まった。

出発前、ワイルドはロンドンで俳優 Herman Vezin から発声や演出方法を学んだにもかかわらず、1月9日、ニューヨーク Chickering Hall で行われた講演 'The English Renaissance' では、緊張のためか原稿に釘付けであり、演出方法においては明らかに失敗した。ワイルドは唯美主義的な衣装を身につけてはいたが、Bunthorne のイメージを排除し、アメリカでは自由主義思想を背景に、唯美主義運動がいかにアメリカ的であるのか、また、人生の目的は生を燃焼させることであり、そのためにはより強烈な個性を発揮することが大切であると述べた。聴衆に向かって語るワイルドの姿は、*The Picture of Dorian Gray* の中で Dorian に熱弁をふるう Lord Henry Watton を思い出させる。

ワイルドの講演旅行は New York から Philadelphia, Washington, Boston などの大都市ばかりでなく、田舎の小さな町にまで及んだ。時には講演内容がテレックス等で伝えられ、講演前に新聞で紹介されることもあった。そこでワイルドは 'The English Renaissance in Art' を2分割して講演内容に修正を加え、それぞれ 'The Decorative Arts' と 'The House Beautiful' というものに作り替えた。これまでの唯美主義の概念や歴史的な流れを解説する理論的なものをより具体化して、日常生活に美的なものを取り

入れる重要性を説いた。

ワイルドの影響があったかもしれないが、Arts and Crafts Movement は1890年代からアメリカにも波及して、1890年には Boston と Chicago に工芸協会が結成され、その後全土に25ほどの同種の団体ができたといわれる。アメリカには歴史的に自然の素材を利用して生活する arts and crafts が深く根付いていた。Walden の著者 H. D. Thoreau がひとり思索と労働の日々を送ることができたのも、実はそれ以前に鉛筆製造職人としての修練と技能があったからであろう。

アメリカでの講演は、ワイルド自身の名声を高めただけでなく経済的にも潤い、莫大な利益をあげた。76年に父 William が死去し、残された家族は多くの借金を抱えた。ロンドンに移住後も、本国から定期的を送金されるはずのものが届かず、経済的にも精神的にも苦しい生活を送っていた。母親 Jane (Speranza) にとって、少なくともオスカーの成功は精神的な支えになった。かつて独立運動に青春を傾け、彼女の詩は人々の心を動かし、大飢饉によりアメリカへ移住した多くのアイルランド人にとって、彼女の名前は心に深く刻まれており、息子オスカーを講演者に迎えることは感慨深かった。モース大佐から講演旅行の延長をワイルドが依頼されたのも、カリフォルニアに多く在住する Irish-American の観客を見越してのものだった。'The Irish Poets of 1848' (Platt's Hall, San Francisco, 1882. 4. 5) と題する講演の中で、ワイルドが Speranza の詩を引用すると、会場からは大きな歓声があがったという。また、彼はこの旅行で得た収益の一部を母親に仕送りして、生活を助けていた。アメリカでの経験は、後に小説 *The Canterville Ghost* にも反映されている。

The Irish Nation 紙 (New York, 1882. 1. 14) に掲載された講演記事のタイトルには、'Talent Sadly Misapplied' という言葉が最終行に加えられている。なるほど母国アイルランドに創作活動の基盤があれば、オスカーの別な才能が発揮されたかもしれないが、異国での生活を通して彼は自己完成を図り、アイルランドに生活する人以上に、彼はより Irish であった。つまりオスカーにとって芸術の上では両国は分けられるものではなく、グローバルな視野を絶えず持ち続けていた。

講演旅行中、母親 Jane はオスカーと噂のあった Constance とその兄 Otho をよく自分のサロンに招待して手厚く歓待した。息子の将来を気遣い、幸せな結婚を願う母親の気持ちは、いつの時代も変わらないグローバルなものである。